静岡発 こう読む

▶▶▶加藤裕治

対面授業の学生コメントから

私が勤務する静岡文化芸術大学、また非常勤をしている東京の某私立大学も、十月の三週目から対面授業を再開した。

特に東京での授業は、およそ一年半ぶりの対面であった。学生からは「必要なことだけを淡々とやらなければならない遠隔授業は苦しかった」といったコメントもあるなか、多くが対面の再開を喜ぶものだった。だが一方で、今後の授業では、対面と遠隔をうまく活用してほしい、という冷静な意見も目立った。

彼らによれば、遠隔授業は「学習を進めやすい」、対面授業は「発想が膨らむ」とのことであった。動画配信の授業であれば、いつ、どこでも繰り返し見られるので、自分のペースで進められる。一方、対面はその場のライブ的な雰囲気や、思わぬ教員の雑談によってインスピレーションが湧くようだ。いずれにせよ大学の授業方法は、コロナ禍で大きく変化した。

このようにコロナ禍の間に変化したものは多いが、「マスコミュニケーション論」という授業での学生コメントもその一つだ。この授業では、十七世紀イギリスの出版統制について論じる回がある。自由に内政ニュースが出版できない時代ではあったが、つかの間、統制が緩んだ時期があった。その限られた時期の出版が、「言論の自由」の重要さを人々に喚起したと言われている（伊藤明己「メディアとコミュニケーションの文化史」世界思想社）。

コロナ禍以前、この講義に対する学生コメントは「言論の自由が大事だとわかりました」といった定型的なものが多かった。しかし、今年は「一度経験した自由が、不自由になった時、その自由がどれほど貴重な価値であるのか身にしみてわかる」といった意見も出るほどだった。コロナ禍の体験が、このコメントを導いている。

さて、本日は第四十九回衆議院議員総選挙の投票日である。このように自由について深く考えた学生に一人でも多く投票に向かってほしい。それは政治に参加する「（国家への）自由」の行使でもあるのだから。

（静岡文化芸術大学教授）

2021年10月31日
中日新聞（朝刊）　P.5